

藤原館長が高校生に読んでほしい万葉歌

*歌の配列は、山本健吉・池田弥三郎『万葉百歌』に準じています

*万葉歌の漢字かな交じりの表記は、小学館新編日本古典文学全集『万葉集』を参考にして、一部改めてあります

*現代語訳は、折口信夫『口訳万葉集』や『万葉集講義』などを元に、一部改めてあります
*歌の内容についての説明は『万葉百歌』を元にしてあります

第一期（飛鳥時代）

磐姫皇后、天皇を思ひて作らず歌

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に 我が恋止まむ （巻二・八八）

秋の田に実った稲穂の上に、ぼうと懸っている朝霞が、何方かへ消えてなくなるように、自分の慕う心も、どちらへでも消散させたいが、到底、何方へも散らすわけにはいかない。

□自分の恋の思いは、苦しくてならないから、どちらへなりとも消散させてしまいたいのだが、深く心にしみついていて、到底消えてしまいうるにない、というのである。そういう気持ちに導かれたのは、秋の田の上にぼうっとかかっている朝霞を目にしていた時、この霞は、日がのぼれば、やがてどちらへともなく消えて行ってしまふのだと、ふと思っただけのこと。

雄略天皇の御製歌

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に 菜摘ます見 家告らせ 名告らさね そらみつ
大和の国は 押しなべて 我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こそば 告らめ 家をも名をも
（巻一・一）

籠や、篋や。その籠や、篋を持って、この岡で、菜を摘んでいなさる娘さんよ。家をおっしゃい。名をおっしゃい。この大和の国は、すっかり天子として、私が治めて居る。一体に治めて私がいる。どれ私から言いだそうかね。私の家も、名も。

□いれ物を持ち、へらを持って、菜（副食物）を採っている娘に天皇が言いかけて、どこの子で、名は何と云うのか、問うた。それについて、天皇みずから名を名告り、自分こそはこの倭の国のあるじである、と告げたのである。

岡本天皇の御製歌

夕されば 小倉の山に 鳴く鹿は 今夜は鳴かず 寝ねにけらしも （巻八・一五一一）

何時も日暮れになると、小倉山で鳴く鹿は、今夜は鳴かない。もう寝て了うたのに違いない。

□小倉の山というのも、今の場所のどこにあたるのかは、はっきりとこと指すわけにはいかない。おそらく、天皇の宮殿近くの山であったのだろう。というのは、夕されば鳴くという毎日の経験に対し、「今夜は鳴かず」と、特殊な、今の経験を歌っているのだから、山の位置と作者の関係を、そう考えるのが普通であろう。

岡本天皇の御歌

山のはに あぢ群騒き 行くなれど 我はさぶしゑ 君にしあらねば (巻四・四八六)

向こうの山際には、鴨の一かたまりが鳴きたてて行くが、併し自分の逢いたい人はいられないから、少しも気を慰めず、淋しいことよ。

□女帝である作者が、目前にどやどやと群れつつ通る群衆の中の、誰一人もわが思うお方でないことをさびしまれている歌

有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌

岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへり見む (巻二・一四一)

自分は今、此岩代の浜を通るが、とても再引き返して、ここを通り過ぎることはできない。今、世の人がするように、浜の松の枝を結び合せて、命や、旅路の無難を祈って行くが、万一達者で居たならば、再びこの松を見よう。

□岩代にいらっしやる道の神様に、海岸の松にわたしの魂を結びつけて、わたしが健康でありますようにとお祈りいたします。わたしの願い通り、わたしが健康でしたら、わたしはまた帰りにもこちらに立ち寄って、また神様に何かさし上げましょう。およそこんな意味だ。

中大兄の歌

わたつみの 豊旗雲に 入り日さし 今夜の月夜 清く照りこそ (巻一・一五)

海の上に、大きな雲がひろがっている。その雲に落日がさすくらいの天気になって、今夜の月は、きれいに照ってくれ。

□天智天皇がこの印南野に來られて、昔の伝説を思い浮かべられて前二首を作り、そしてその場の光景として第三首目の「わたつみの」を作られた、と見れば、創作動機はよくわかる。

額田王の歌

熟田津に 舟乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな (巻一・八)

伊予の熟田津で、舟遊びをしよう、と月の出を待っている中に、月も昇り、潮もいい加減になってきた。さあもう漕いで出ようよ。

□船出をしようとして、満潮になるのを待っていると、月がのぼって来て、そしてようやく海水も満ちてきた。さあ漕ぎ出そう、というのである。

額田王、近江国に下る時に作る歌

うまさけ 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで 道の隈 い積もるまで につばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや (巻一・一七)

反歌

三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべしや (巻一・一八)

旅の初めに出来た三輪山も、もはや平城山の山の端に隠れてしまつて、見えなくなつてしまつまで、道の辻がいくつもいくつも曲がつて遠くなるまでに、じつと目を放さないで、何度も振り返つて、はるかに眺望しようと思つている山を、思いやりもなく、雲が隠すことだ。山にも心があらば、隠せないはずなのに。

は
懐かしい三輪山をば、あんなに隠しなさることよ。せめて雲にでも、思いやりがあってくれればいい。隠す
ずはないのに、隠すことだ。

□大和の国の三輪山よ。その山を、いよいよ大和の国境を越えて山城の国へ踏み入るので、その国境の奈良山
で、山ノ間にみえなくなりそうになったり、道を曲るたびに見えなくなりそうになったりするのを、いつま
でもよく見ようとし、何度も何度も振り返っては遠望して、別れを惜しんでいる私だ。それを、ひとの気も
知らないで、雲なんかには隠されてよいものか。

天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る (巻一・二〇)

皇太子の答ふる御歌

紫の にほへる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめやも (巻一・二二)

紫草の花の咲いている野即、天使の御料の野を通って、我がなつかしい君が袖を振って、私に思う心を示し
ていられる。あの優美な御姿を、心なき野守も見ではじどうだ。

ほればれするような、いとしい人だ。その御前が憎いくらいなら、すでに人妻であるのに、その御前のため
に、どうして私が、こんなに焦れているものか。

額田王、近江天皇を偲ひて作る歌一首

君待つと 我が恋ひ居れば 我がやどの 簾動かし 秋の風吹く (巻四・四八八)

今にもあの御方がお出になるか、と待ちこがれて居ると、
人の来るさきぶれの様に、秋の風ばかりが、自分の家のすだれを動かして吹きこんで来た。

鏡王女の歌

神奈備の 磐瀬の社の 呼子鳥 いたくな鳴きそ 我が恋増さる (巻八・一四一九)

神奈備山のほとりの磐瀬の森で鳴いている呼子鳥よ。たださえ感じやすくなっているのだから。どうか、
そんなにひどく鳴いてくれるな。自分の焦れる心が弥深くなるから。

内大臣藤原卿、采女の安見児を娶く時に作る歌

我はもや 安見児得たり 皆人の 得かてにすといふ 安見児得たり (巻二・九五)

どうだ。俺はねい、安見児を手に入れたぞ。それ、誰も彼も、皆手に入れにくがっているという評判の、
安見児をば手に入れたぞ。

第二期 藤原時代

天皇の御製歌

春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山 (巻一・二八)

春がすんで、今夏が来たに違いない。真白な栲の衣を乾してあるのが見える。天の香具山の辺で。

□「来たるらし」というのは、来たらしいという程度の想像ではなく、来たのに違いない、という自信を持った想像。そしてその自信の根拠は、白栲の衣が乾してある、ということなのだ。

大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にして涙を流して作る歌

百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ (巻三・四一六)

これまでは、たびたび磐余の池に来て遊んだが、その池の鴨も、今日で見納めだ。これを限りとして、自分は死んでゆくことであろう。

□池の鴨は、皇子がいつも見馴れ、親しんだ鳥であった。それは魂を運搬する鳥でもある。これから死んで行こうとする自分の魂の姿を、そこに見ているのかも知れない。

大伯皇女の作る歌

我が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 我が立ち濡れし (巻二・一〇五)

大事のあなたを、大和へ立たすというので、夜更けてから外へ出て、明け方近い露のために、立っていて濡れたことだ。

□今の関係で言えば、この唄、姉が弟に対して歌っているのだが、この「わがせこ」との呼びかけは、単純に、皇女が兄弟としての皇子に呼びかけたとしたのでは十分でない。

大伯皇女の哀傷して作らす歌

うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見む (巻二・一六五)

肉体を持った人間である私として、大事の弟を葬った山だから、明日からは、二上山をば兄弟として見ねばならぬのだろうか。

□この一首は、素朴ながらしつとりとした悲しみの色合いを見せている。

五句の原文「弟世」を「いろせ」と訓んだのは、おそらく折口説が最初だろうが、今また「をとよ」も新訓である。ただし、これは書き物には見えない。

舍人皇子の御歌一首

ますらをや 片恋せむと 嘆けども 醜のますらを なほ恋ひにけり (巻二・一一七)

立派な男が、ぐずぐずと、思わぬ人を慕うたりすべきものではないと悲しいながら、決心はしてはみるものの、この業さらしの意気地なしの男は、まだ恋しがっている。我ながら情けない。

□自分の思いを、物や景に託したりしないで、太い線でずばりと云ってのけた面白さがある。

弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

古に 恋ふる鳥かも ゆづるはの 御井の上より 鳴き渡り行く (巻二・一一一)

あの鳥は、自分とおなじく、昔のことに焦れて、鳴く鳥だろう。その鳥が、父君天武天皇の御遊びになった、ゆづるはの泉の上を鳴いて通って行きます。

□ホトトギスの声を聞いた時に、作者がふと、老年で京に残っているはずの額田王の生御魂が、今ここを鳴きすぎたホトトギスではないか、ホトトギスの声を聞いて、額田王の魂が肉体をあこがれ出て、ここまでついて来たのではないか、というように感じた感じ方が根底にあって作られている。

軽皇子、安騎の野に宿る時に、柿本人麻呂が作る歌

やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 都を置きて こもりくの 泊瀬の山は 真木立つ 荒き山路を 岩が根 禁樹押しなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる 夕さりに来れば み雪降る 安騎の大野に はたすすき 小竹を押しなべ 草枕 旅宿りせず 古思ひて (巻一・四五)

我が仕え申す皇子なる、日の御裔の尊い皇子は、神様そのままの神わざをばせられるために、御所のある京を後にして、泊瀬山は、檜木の立っている険しい山道なのに、灌木を押し分けて、朝越えておいでになり、日暮れになった時分、安騎の平野に、穂薄や篠などを押し分けて、そこで旅の宿りをなされることだ。以前、日並知尊が、たびたびここへ狩りに来られた時分の事を思いながら。

安騎の野に 宿る旅人 うちなびき 眠も寝らめやも 古思ふに (巻一・四六)

ま草刈る 荒野にはあれど もみち葉の 過ぎにし君の 形見とそ来し (巻一・四七)

東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ (巻一・四八)

日並の 皇子の尊の 馬並めて み狩立たしし 時は来向かふ (巻一・四九)

安騎野で宿る、旅人なる軽皇子さまよ、その方は、ここが昔父皇子の、常に遊ばれた処だから、昔のことを思うと、のびのびと、寝るにも寝ていられないことであろう。

荒れはてた野は荒野として、ご承知の上でここへこらえたのは、おかくれになった方が、よくお出になった、その記念だと思って、尋ねて来られたことだ。

東の野を見ると、朝日のほのめきのさすのが見えているので、振り返って見ると、月は最早、西のほうに傾いてしまった。

お懐かしい日並皇子さまが、ここまで馬を並べて来て、御猟を挙行遊ばした時節は、ちょうどこれからで、そういう時候が、今来かかっている。お懐かしいことだ。

しきたへの 袖交へし君 玉垂の 越智野過ぎ行く またも逢はめやも (巻二・一九五)

そんなに尋ねてお歩きになつても、袖を交わして一緒に過ごしたお方は、越智の野原で、消えておしまいになった。二度と会えないでしょうか。

□この短歌は、枕詞を二つも使っている。「しきたへ」は袖・枕・衣・袂・床・子などにつき、織り目のこまかい布で、美しく立派だという感じを伴う。「玉垂の」も、玉を緒に貫き垂れる飾りから「を」につくのだから、美しい語感を持つ。無意味な枕詞ながら、一首の情緒としては、大事な働きをしている。

柿本人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌

ささの葉は み山もさやに さやげども 我は妹思ふ 別れ来ぬれば (巻二・一三三)

自分が越えて行く山一面に生えた笹が、山もとよむばかりに、やかましく騒いでいるが、その音にもまぎれないで、私はいとしい人のことばかり思っている。悲しい別れをして来たので。

□小竹の葉や荻の葉は、祭のときに手に取って舞う採物、すなわち鎮魂の道具に使われ、そのさやさやという音に、神聖なものを感じていた。神の来臨の気配を、さや・そよといった擬音で現している。山の小竹の葉のそよぎの音に、何かの訪れて来るような気配を感じている。

柿本人麻呂が羈旅の歌

荒たへの 藤江の浦に ずき釣る 海人とか見らむ 旅行く我を (巻三・二五二)

旅路の船に乗って旅行している自分を、知らぬ人は、スズキを釣っている海人と思っていることだろう。

□このような歌が共感と呼んだということは、旅先で互いに言い現しがたい寂しさを心にかみしめていたからだ。こういう歌を聞くと、「お前もか」「おれも」と、たがいにうなずき合い、会得しあったのである。

柿本人麻呂が歌

近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もののに いにしへ思ほゆ (巻三・二六六)

近江の湖水。その夕波に鳴く千鳥よ。おまえが鳴くと私は意気消沈して昔のことが思われてならぬ。

□「夕波千鳥」は美しい造語である。「近江の海」「夕波千鳥」と名詞をたたみかけ、小休止を置き、千鳥を呼格として、「汝が鳴けば」と呼びかけの形に移っている悠々とした呼吸がよい。さらに「心もののに」と、振り返って自分の心のうちしおれた状態を言い、冒頭の句の字余りと呼応して、結句も44の字余りで、ゆったりと歌い収めている。緩急自在で、きわめて流動的・曲線的で、柔らかに鷹揚な抒情ながら、切実な主観が徹っている。

柿本人麻呂の歌

玉衣の さるさるしづみ 家の妹に 物言はず来にて 思ひかねつも (巻四・五〇三)

騒がしく嘆く人を鎮めるために、ものもいわずに故郷の妻に分かれてきて、あの時あんなに、気強くしなかつたらよかつた、と我慢できないほどに恋しくなってくる。

□下の句は特に優秀だが、上の句の方は、近代的な感じ方からは無内容にしか聞えて来ない。それは、この語句を形成して来た背後の長い宗教的な生活が、今のわれわれとはまったく断絶してしまっているため、この語句が、なんら実感として映ってこないからである。

柿本人麻呂の歌集に出づ

あしひきの 山川の瀬の 鳴るなへに 弓月が岳に 雲立ち渡る (巻七・一〇八八)

谷川の浅瀬に波の音がひどくしだしたと同時に、弓月ヶ岳に雲が一带に出てきた。

□こういう歌を読むと、万象を生きたものとして感じ取った古代人の自然観を、ひしひしと感ずるのである。彼等はずねに讚め言葉でもって自然を呼ぶが、それは彼等が日常自然に対して、畏敬と愛護の気持を忘れて

いないことを物語っている。

▽この歌のよさを発見したのは伊藤左千夫で、門下の赤彦・茂吉等が強調してから、集中の代表的な名歌とされるに至った。別に岩野泡鳴が、大正六年にこの歌を人麻呂の傑作の一つに挙げています。人麻呂の作であろうと、彼等はほとんど断定に近い語気で言っている。

弓削皇子に献る歌一首

御食向かふ 南淵山の 巖には 降りしはだれか 消え残りたる (巻九・一七〇九)
右、柿本人麻呂が歌集に出づる所。

あなたのいらっしやる南淵山の岩の上には、以前降ったまだらの雪が、まだ消え残っているのですか。

□南淵の巖石崇拜を背景にした歌であることは、想像できる。はだれ雪を詠んだのは、やはり皇子の寿を予祝する意味が含まれている。

▽この歌は、大正十四年夏、島木赤彦が比叡山アララギ安居会で講じて以来、有数の秀歌として喧伝されるに至った。赤彦はこれも人麻呂作だろうと言っている。

春の雑歌

ひさかたの 天の香具山 この夕 霞たなびく 春立つらしも (巻十・一八一二)
右、柿本人麻呂が歌集に出づ。

向こうに見える天の香具山よ。今夜見渡すと、あの山に霞が長くかかっている。それで見れば、どうやら、今、春が到来したらしい。

長谷の 弓月が下に 我が隠せる妻 あかねさし 照れる月夜に 人見てむかも (巻十一・二三五三)

あの泊瀬の山にある神木のケヤキの木の下に、自分が行くまで待たせて、隠れさせている美しい人を、ひよっとすると、今頃、月の光で人がみつけてはいまいか。

ますらをの 思ひ乱れて 隠せるその妻 天地に 通り照るとも 頭はれめやも (巻十一・二三五四)

立派な男が、一心不乱に決心して隠して、盗み出しておいたその美しい女は、美しくて、天地の間に透き通るほどであっても、隠れ場所が、人に知られる心配はあるものか。

皇子尊の宮の舍人等の慟傷して作る歌

朝日照る 佐田の岡辺に 群れ居つつ 我が泣く涙 止む時もなし (巻二・一七七)

我々皇子の遺臣が、朝日のさす佐田の岡のほとりに集まって、泣く涙が、いつまでも絶えずに落ちてくる。

高市古人、近江の旧き堵を感傷して作る歌

古の 人に我あれや ささなみの 古き都を 見れば悲しき (巻一・三二)

自分は、今の世の人間である。それに、昔のささなみの県の古い都の跡を見ると、悲しくなってくる。ひよっとすると、自分が昔近江の朝廷に仕えていた人なのだろうか。なんだか、昔の人のような気がする。

高市連黒人が羈旅の歌

旅にして もの恋しきに 山下の 赤のそほ舟 沖を漕ぐ見ゆ (巻三・二七〇)
我が舟は 比良の湊に 漕ぎ泊てむ 沖辺な離り さ夜ふけにけり (巻三・二七四)
いづくにか 我が宿りせむ 高島の 勝野の原に この日暮れなば (巻三・二七五)

旅に出ている、故郷が恋しく思われる頃に、都風の朱塗りの立派な船が、沖の方を漕いで行くのが見える。夜が更けた。沖の方へ遠く漕ぎ離れるな。今夜は、この船は比良の港に泊まろう。この高島の勝野の原の中で、今日の日が暮れてしまったら、どこで私は泊まろうか。家も見えないが。

長忌寸奥麻呂の歌

苦しくも 降り来る雨か 三輪の崎 狭野の渡りに 家もあらなくに (巻三・二六五)
さし鍋に 湯沸かせ子ども 櫛津の 檜橋より来む 狐に浴むさむ (巻十六・三八二四)

困ったことに降ってきた雨だよ。三輪山の突き出た崎の狭野のあたりには、家は一軒もないのだ。それに。銚子に湯を沸かしておけ、家来どもよ。あの春日野の檜橋を越えてやってくる狐に浴びせてやろう。

志貴皇子の作らず歌

葦辺行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ (巻一・六四)

今夜は寒い夜だ。葦の茂っている海岸を泳いでいる鴨の羽の合わせ目に、霜が降るといような冷たい晩だ。今夜は、大和のことが思い出されてならない。

志貴皇子の懼びの御歌一首

石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも (巻八・一四一八)

岩の上をほとぼしって流れる瀧のほとりのワラビが、生え出す春になったことだ。そのように自分の運も、これからだんだん開けて来る。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣はす時に、山辺の御井にして作る歌
うらさぶる 心さまねし ひさかたの 天のしぐれの 流れあふ見れば (巻一・八二)

心さびしいような気分が、いっばいに広がってくる。今、天から落ちる時雨が降っている。それを見ると。

長田王の作る歌一首

隼人の 薩摩の瀬戸を 雲居なす 遠くも我は 今日見つるかも (巻三・二四八)

隼人の住む国なる薩摩海峡を、空か海かわからないような水平線のあたりに、はるかに、今日はじめて見たことだ。

田口益人大夫、上野の国司に任ずる時に、駿河の清見の崎に至りて作る歌二首
廬原の 清見の崎の 三保の浦の 豊けき見つつ 物思ひもなし (巻三・二九六)

廬原郡の清見ヶ崎のあたり、三保の浦のゆったりした海の景色を見ながら、何事もすっかり忘れて、物思いもなく、ただ眺めいつているばかりである。

穂積親王の御歌一首

家にありし 櫃に鑱刺し 蔵めてし 恋の奴が つかみかかりて (巻十六・三八一六)

前からあまりに苦しいので、家にあつた櫃に、錠をさして置いた恋の野郎が、どこからか出てきて、また自分の胸にすがりついて、自分を迷わすつことだ。

尾張連の歌

うちなびく 春來るらし 山のまの 遠き木末の 咲き行く見れば (巻八・一四二二)

どうやら春がやって来たに違いない。あの山際のはるかなこずえが、先へ先へとずんずん咲いていくのを見る。

卷十三の作者未詳の歌

三諸は 人の守る山 本辺には あしび花咲き 末辺には 椿花咲く うらぐはし 山そ 泣く子守る山 (巻十三・三二二二)

三諸は人のもる山である。ふもとには馬酔木の花が咲き、山の先のほうには椿が花咲いている。美しい山であることよ。泣く子、それを守る山よ。

かむとけの 日香空の 九月の しぐれの降れば 雁がねも いまだ來鳴かぬ 神奈備の 清きみ田屋の
垣内田の 池の堤の 百足らず みそ槻が枝に みづ枝さす 秋のもみち葉 巻き持てる 小鈴もゆらに
たわやめに 我はあれども 引き攀ぢて 峰もとをきに ふさ手折り 我は持ちて行く 君がかざしに (巻十三・三二二三)

秋の末の九月の時雨が降るときに、かりがねもまだ鳴かないし、神南備の社の御田の、その清らかなさつぱりとした田屋の、垣の内の、田の池の堤のあるところの、神木のタブーのかかっている槻の木の枝に、こちらから、みずみずしい枝をさしかけている、この紅葉した葉、それを、しじゅう手にまきつけている鈴が、ゆらゆらと音がするほど、手を伸ばして、こんなたよたよした女で私はありますが、それっをひっぱり寄せてひっぱり寄せて、山の峰が曲がるほどに引き寄せて、それを枝ごと折って私は持つて行くことだ。いとしいお方のあたま飾りとして。

娘子らが 麻笥に垂れたる 続麻なす 長門の浦に 朝なぎに 満ち來る潮の 夕なぎに 寄せ來る波の
その潮の いやますますに その波の いやしくしくに 我妹子に 恋ひつつ來れば 阿胡の海の 荒磯の
上に 浜菜摘む 海人娘子らが うながせる 領中も照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白たへの 袖
振る見えつ 相思ふらしも (巻十三・三二四三)

娘子たちの持つている麻笥に垂れている、つむいでいる麻の緒のような、長い、その長門の浦に、朝なぎのときにさしてくる潮のごとく、夕風のときに寄ってくる波のごとく、その波や潮のように、いよいよますます繰り返す繰り返す、彼女に憧れ憧れしてやってきたときに、阿胡の海の荒い岩石のほとりで、浜の菜を摘

んでいる、海人の村の娘子たちが、首にかけている領巾が光るほどに、それからまた、手に巻き付けている珠が、微妙な音を立てるように、白袴の袖を振っているのが見える。あの娘子たちも、俺を思っているにちがいないことよ。

磯城島の 大和の国に 人二人 ありとし思はば 何か嘆かむ (巻十三・三二四九)

この大和の国に、同じような人が二人いるのだと思われれば、このようにまで、なにもため息ついて焦がれることはないのだが、いとしいあの人の外に、身代わりになる者はない、と決まっているので、嘆かすにはいられない。

さし焼かむ 小屋の醜屋に かき棄てむ 破れ薦を敷きて 打ち折らむ 醜の醜手を さし交へて 寝らむ
君故 あかねさす 昼はしみらに ぬばたまの 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも
(巻十三・三二七〇)

焼いてしまいたくなるころの、ちっぽけな家の、そのみっともない家に、かき捨てたくなるようなぼろ薦を敷いて、かき折りたくなるような、そのみっともない手をさし交して寝るずの君だのに、その君を昼は一日中、夜は夜じゅう、この寝ている床がぎゅうぎゅう音のするほど寝返りうって、こがれて溜息づいていることよ。

二つなき 恋をしすれば 常の帯を 三重に結ふべく 我が身はなりぬ (巻十三・三二七三)

このほかに二つとない恋をしておるので、あたりまえの帯を三重に結わえるほどに、自分の身体はなった。

たらちねの 母にも告らず 包めりし 心はよしゑ 君がまにまに (巻十三・三二八五)

お母さんにもうちあけないで、大事に慎んで、隠した心をゆるめて、あなたのなさる通りにうち解けた。

うちひさつ 三宅の原ゆ 直土に 足踏み貫き 夏草を 腰になづみ いかなるや 人の見故そ 通はすも
我子 うべなうべな 母は知らじ うべなうべな 父は知らじ 蟪の腸 か黒き髪に 真木綿もち あざさ
結び垂れ 大和の 黄楊の小櫛を 抑へ刺す うらぐはし児 それそ我が妻 (巻十三・三二九五)

三宅の原を、地面にぶすぶすと足をつきこんで、夏草を腰で押し分けて、はかどらないが、進んで行き、そうして一体、どこかの家の娘さんか知らないが、苦心して通って行きなさるのだ。坊ちゃん。母親の知らないのも無理もない。父親の知らないのもつともだ。真つ黒な髪を木綿で結んで、結び垂らし、黄楊の櫛をさへにして、さしている美しい娘は、自分のいとしい人だ、と思ってください。

父母に 知らせぬ見故 三宅道の 夏野の草を なづみ来るかも (巻十三・三二九六)

父や母に隠して知らさないで通っている人のために、三宅への道に生えている夏野の草を、分け悩んでやって来たのだ。

物思はず 道行く行くも 青山を 振り放け見れば つつじ花 にほえ娘子 桜花 栄え娘子 汝をそも
我に寄すといふ 我をもそ 汝に寄すといふ 荒山も 人し寄すれば 寄そるとぞいふ 汝が心ゆめ

せめて道を歩くのに、物思いをせずに歩きたい。青々とした山をはるかに見渡すと、そこに咲いているツツジのように、華やかな娘子で、桜の花のように、今が盛りの頂上である。娘である君を、人が私と並べて、評判を立てているということだ。心無い険しい山でも、人が評判を立てると、寄ってくるということだ。君の心もゆるめないうで、評判に負けて人にあらわさないでいてくれ。

巻十四の東歌

常陸国の歌

筑波嶺に 雪かも降らる いなをかも かなしき児ろが 布干さるかも (巻十四・三三五二)

筑波山が、真っ白になつている。あれは、雪が降つているのか。それとも、かわいい娘たちが、あのあたりの名産のさらしの布を乾かしているのかなあ。

足柄の 刀比の河内に 出づる湯の よにもたよらに 児ろが言はなくに (巻十四・三三六八)

足柄山の土肥川の流域に、湧き出る温泉ではないが、実際、真にきれてしまい相に、かわいらしい人がいったわけではない。だから、いくぶん望みはあるのだ。心配するにはあたらさない。

足柄の み坂恐み 曇り夜の 我が下延を 言出でつるかも (巻十四・三三七二)

足柄の峠にいらつしやる神様は、心に隠していることを言わないと通さないと道祖神であるから、その神慮の恐ろしさに、心のそこで思っていた自分の思いをとうとう口に出してしまった。

多摩川に さらす手作り さらさらになにその児の ここだかなしき (巻十四・三三七三)

多摩川でさらす、さらし布ではないが、いくら思い返して見ても、どうしてこの人が、ひどくかわいいのだろう。

常陸国の歌

筑波嶺の 嶺ろに霞居 過ぎかてに 息づく君を 率寝て遣らさね (巻十四・三三八八)

筑波山の峰に霞がかかって、通り過ぎてしまわないように、思い切ってしまうことができないで、あなたのためにため息をついて、焦れているあのひとを、まあ共寝して、それで満足して、旅にでかけるようにしてげなさいよ。

信濃国の歌

信濃なる 千曲の川の 小石も 君し踏みてば 玉と拾はむ (巻十四・三四〇〇)

信濃国の千曲川のさざれ石も、あなたが踏んで行くなれば、玉と違って拾いましょう。

上野国の歌

我が恋は まさかもかなし 草枕 多胡の入野の 奥もかなしも (巻十四・三四〇三)

私の焦れている心は、目の前に差しあたった今も悲しいことばかりだしこの多胡の入野の奥の方ではないが、奥、つまりこれから先も、どうやら悲しいようであるよ。

上野 安蘇のま麻群 かき抱き 寝れど飽かぬを あどか我がせむ (巻十四・三四〇四)

いとしさに、上野国の安蘇の里の真麻の生えたかたまりを刈るように、引き抱えて寝ても、満足ができない。どうすれば私は満足するのだろうか。

伊香保ろの やさかのゐでに 立つ虹の 頭はろまでも さ寝をさ寝てば (巻十四・三四一四)

伊香保の山の八尺もある用水の堀のあたりに立っている虹ではないが、あのように、人の目について現れるまでも、満足するほど寝たなら見つかってもかまわない。

陸奥国の歌

筑紫なる にほふ見故に 陸奥の 香取娘子の 結ひし紐解く (巻十四・三四二七)

九州にいる、美しい娘さんのために、東国の地方の果ての、香取の里の娘が結んだ紐を、解いているよ。きつと。

足柄の わを可鶏山の かつの木の 我をかづさねも かづさかずとも (巻十四・三四三二)

足柄のわをかけ山のカツの木ではないが、私を親のところから、誘拐して逃げてください。誘拐しにくいとしても。

鈴が音の 駅家の 堤井の 水を飲へな 妹が直手よ (巻十四・三四三九)

この街道の駅家の屋敷にある囲いをした井戸の水をください。いとしい人の手から直接に。

おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草交じり 生ひは生ふるがに (巻十四・三四五二)

おもしろい眺めの野を焼いてはならない。去年からの古い草に新しい草が混じって生えれば、生えるようにまかせておいたほうがよい。

稲搗げば かかる我が手を 今夜もか 殿の若子が 取りて嘆かむ (巻十四・三四五九)

始終稲をついているために、かがの切れた私の手を今夜あたりは御殿の若様がかわいそうだと手にとってお嘆きくださることだろう。

間遠くの 野にも逢はなむ 心なく 里のみに 逢へる背なかも (巻十四・三四六三)

人里離れた野で出会えたらいいのに、気なしにも、街中でくわしたいといい人よ。それでは話もできません。

子持山 若かへるての もみつまで 寝もと我は思ふ 汝はあどか思ふ (巻十四・三四九四)

子持山の若いカエデが紅葉する頃まで寝ていよう、と自分は思うが、お前は思うか。

橘の 古婆の放髪が 思ふなむ 心愛し いで我は行かな (巻十四・三四九六)

橘樹の郡のこばの村の小娘が、自分を思っている心がかわいい。どりゃ私は遭いに出かけましょう。

新室の ござきに至れば はだすすぎ 穂に出し君が 見えぬこのころ (巻十四・三五〇六)

新しく建てた室で作る蚕の、飼養時分になったので、私が意中を表した方が逢いに来てくださらないこの頃よ。

谷狭み 峰に延ひたる 玉かづら 絶えむの心 我が思はなくに (巻十四・三五〇七)

谷が狭いので、峰にはいのぼつてあがつているカツラではないが、切れようという気持ちは少しも思っていない。

汝が母に ころれ我は行く 青雲の 出で来我妹子 相見て行かむ (巻十四・三五一九)

君の母上にわめかれて、私は帰っていくのだ。愛しい人よ、表へ出てきてくれ。顔を見合つて帰つてゆくから。

面形の 忘れむしだは 大野ろに たなびく雲を 見つつ儂はむ (巻十四・三五二〇)

顔の形が忘れそうになった時は、大野というところの野原に棚引いている雲を見ながら、君のことを思い出していよう。

水鳥の 立たむ装ひに 妹のらに 物言はず来にて 思ひかねつも (巻十四・三五二八)

出発の用意にまぎれて、いとしい人に物も言わないでやって来て、恋しさに辛抱できないことだ。

等夜の野に 兔ねらはり をさをさも 寝なへ見故に 母にころはえ (巻十四・三五二九)

等夜の野でウサギを狙っているのではないが、おさおさ果敢果敢しゅうも共寝もしない人なのに、そのために母上に叱られることだ。

青柳の 萌らる川門に 汝を待つと 清水は汲まず 立ち処平すも (巻十四・三五四六)

青々とした柳の萌えだしている川の渡り場で、お前さんを待とうとして、汲みに来た清水も汲まずにじっと立っている場所に、いつまでもいることだ。

かの児ろと 寝ずやなりなむ はだすすき 宇良野の山に 月片寄るも (巻十四・三五六五)

あの娘ともう共寝をすることはできなくなるだろう。今夜も逢わないうちにあの裏野の山に月がさしかかって傾いていることだ。

第三期 和銅・養老時代

山部赤人、富士の山を望む歌一首

田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける (巻三・三一八)

田子の浦を歩きながら、ずっと端まで出て行ってみると、高い富士の山に、真白に雪が降っている。

山部赤人、故太政大臣藤原家の山池を詠む歌一首

古の 古き堤は 年深み 池の渚に 水草生ひにけり (巻三・三七八)

故太政大臣がいらっしやった時分に、拝見した庭の池の昔の堤は、その後、多くの年を経て、手入れの行き届いていた池の水際にさえ、水草が生えたことだ。

山部赤人が作る歌

み吉野の 象山のまの 木末には ここだも騒く 鳥の声かも (巻六・九二四)

吉野の象山の上のごずえには、まあほんとに、沢山鳴き騒いでいる、鳥の声であるよ。

ぬばたまの 夜のふけ行けば 久木生ふる 清き川原に 千鳥しば鳴く (巻六・九二五)

夜がだんだん更けてゆくと、ヒサキの生えている清らかな河原に、千鳥がひっきりなしに鳴く。

山部赤人が歌

百濟野の 萩の古枝に 春待つと 居りしうぐひす 鳴きにけむかも (巻八・一四三一)

百濟野に萩の枯れ枝に春の来るのを待つと、去年から泊まっていたウグイスが、もうこの二三日で鳴きだしたことだろう。

笠金村、入唐使に贈る歌

波の上ゆ 見ゆる小島の 雲隠り あな息づかし 相別れなば (巻八・一四五四)

波の上に見えている小島ではないが、止めようとしても溜息が出てくるよ。いられる所が雲に隠れて見えなから。

吉野の離宮に幸す時に、中納言大伴卿、勅を奉はりて作る歌
昔見し 象の小川を 今見れば いよさやけく なりにけるかも (巻三・三一六)

昔来て見た、この象の小川を今来て見ると、昔よりも益々さつぱりとした景色になって見えることだ。

大伴旅人、酒を讃むる歌
あな醜 賢しらをすと 酒飲まぬ 人をよく見ば 猿にかも似る (巻三・三四四)

へん、ざまを見る。そのざまはなんだ。ほんとうに賢ぶつた真似をしようとして酒を飲まない人間をよくよく見たら、サルに似ているだろうよ。

大伴旅人、冬の日に雪を見て、京を憶ふ歌
沫雪の ほどろほどろに 降り敷けば 奈良の都し 思ほゆるかも (巻八・一六三九)

春の雪がまだらに地面に降るのを見ると、奈良の都の様子が思い出される。

大伴旅人の和ふる歌
ますらをと 思へる我や 水茎の 水城の上に 涙拭はむ (巻六・九六八)

自分は立派な男だと自分では思っているのだ。そういう自分でありながら、この水城のほとりで別れがたいと涙を流してしまった。

山上憶良、宴を罷る歌
憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ (巻三・三三七)

私はもう帰ります。私の子どもがいないでしょう。その母親も私を待っているでしょう。

山上憶良、敢へて私の懐を布ぶる歌
天ぞかる 鄙に五年 住まひつつ 都のてぶり 忘らえにけり (巻五・八八〇)

田舎に五年も住んでいて、とうとう優美な都の風俗を、知らぬ間に忘れてしまったことだ。

山上憶良、老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌
すべもなく 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど くらに障りぬ (巻五・八九九)

やるせなく苦しいので、いつそ家を出奔して遠くへ行ってしまうおうと思うものの、かわいい子どもらが邪魔になって、それもできないことだ。

山上憶良
富人の 家の子どもの 着る身なみ 腐し捨つらむ 衣綿らはも (巻五・九〇〇)

大伴旅人の兼従の歌

家にも たゆたふ命 波の上に 浮きてし居れば 奥か知らずも (巻十七・三八九六)

家にいてさえも定まりのない揺れるような人間の命だ。が、こうして波の立つ海上に浮かんでいると、将来どうなることやら、的のつかいないことだ。

大伴宿奈麻呂の歌

うちひさす 宮に行く児を まかなしみ 留むれば苦し やればすべなし (巻四・五三二)

御所へ宮仕えに行く娘さんを、かわいいからと留めておくのは、かえって苦の種になるが、そうかといってやってしまえば、最早、自分の思い通りにはならないから、やるせないことだ。

大伴郎女の和ふる歌

来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものを (巻四・五二七)

あなたは来ようとおっしゃっても、いらっしゃらない時があるのですもの。来ないとおっしゃっていられるのに、おいでになるうという頼みがないから、待たずにいましょう。来ないとおっしゃっていますもの。

大伴坂上郎女の歌

ひさかたの 天の露霜 置きにけり 家なる人も 待ち恋ひぬらむ (巻四・六五一)

天から降る水霜も、もはや降りている頃だろう。今頃は、故郷の家の人は、約束の時が来た、というので、帰りを待ち焦がれているだろう。

大伴坂上郎女の歌

恋ひ恋ひて 逢へる時だに 愛しき 事尽くしてよ 長くと思はば (巻四・六六一)

いつまでも二人の仲を続けようとお思いなさるならば、せめてこうして、焦がれ焦がれてやっと逢えた時だけにでも、どうぞありったけの愛情をお注ぎください。

大伴坂上郎女の歌

青山を 横ぎる雲の いちしろく 我と笑まして 人に知らゆな (巻四・六八八)

青い山の上を、白い霧が横切って通ると、はつきり見えますが、そうした風に、人目につきやすく、思い出し笑いなどして、人に悟られないようにしてください。

冬ごもり 春の大野を 焼く人は 焼き足らねかも 我が心焼く (巻七・一三三六)

春になると野原は焼くが、私の胸もこの頃は思いに燃えるようだ。これはあの野火をつける人が、野を焼くだけでは満足しないで、この私の心まで焼くのであろうか。

境部王、数種の物を詠む歌

虎に乗り 古屋を越えて 青淵に 蛟龍捕り来む 剣大刀もが (巻十六・三八三三)

あの昔いた古家の里の、強い男に駆け抜けるために、虎に乗って行って、青く水の上でいる淵で蛟龍を捕まえて来よう。どうぞ、それに適当な刀があればよいが。

卷七・十・十一・十二・十六の作者未詳の歌

幸ひの かななる人か 黒髪の 白くなるまで 妹が音を聞く (巻七・一四一一)

自分はただ一人だ。それにこの世にはそうでない人がいる。そういう人はどんなに幸福な人なんだろう。髪が真白になるまで愛しい人と話をする事ができるというのは。

今更に 雪降らめやも かぎろひの もゆる春へと なりにしものを (巻十・一八三五)

今頃からまた繰り返して雪の降るはずがないのに降ってきた。もう陽炎も立ち昇る春ととっくになっっているのに。

たらちねの 母が手離れ かくばかり すべなきことは いまだせなくに (巻十一・二三六八)

母の手元を離れてから、こんなにやるせないことはないまだ一度も経験が無い恋は苦しいものだ。

うちひさす 官道を人は 満ち行けど 我が思ふ君は ただ一人のみ (巻十一・二三八二)

御所へ通う大通りを見ると、人がたくさん通っているけれど、自分が思っている人のほかには、心を移すような人も通っていかない。

恋ふること 慰めかねて 出でて行けば 山を川をも 知らず来にけり (巻十一・二四一四)

焦れている胸の中を、なだめ静めることができないで、家を出てぶらぶらやってきたが、その間山を越えたり、川を越えたりするのも分からないでやってきたことだ。

立ちて思ひ 居てもぞ思ふ 紅の 赤裳裾引き 去にし姿を (巻十一・二五五〇)

何をするにしても思い出されるのは、あの人が赤い裾をひいて帰っていった姿だ。

面忘れ だにもえすやと 手握りて 打てども懲りず 恋といふ奴 (巻十一・二五七四)

こんなに思うのは、この憎い恋というヤツのしわざだ。せめてこらしめて殴ってやれば、顔だけでも忘れるだろうと握りこぶしで殴っても、そんなことくらいでは妨げられずに、どんどんつめかけてくることだ、恋というヤツは。

験なき 恋をもするか タされば 人の手まきて 寝らむ見故に (巻十一・二五九九)

あれは人妻だ。それに自分は意味のないことに焦れている。日暮れになると焦れている。他人の手を枕として寝る人であるのに、その人のために焦れている。バカなことだ。

燈火の かげにかがよふ うつせみの 妹が笑まひし 面影に見ゆ (巻十一・二六四二)

火の影で輝くように美しい真正正銘のいとしい人がっこり笑っていた様子が今幻に目についてくる。

たらちねの 母が養ふ蚕の 繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢はずして (巻十二・二九九一)

お母さんの飼っているカイコがマユに籠っているのではないが、愛しい人に会わないで心が屈託することだ。

あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 妹待つ我を (巻十二・三〇〇二)

山から出てくる月を見るために待っているのだと人には言ひて、実はやって来る愛しい人を待っている。

さ檜隈 檜隈川に 馬留め 馬に水かへ 我よそに見む (巻十二・三〇九七)

檜隈よ。その檜隈の川に馬を留めてしばらくは馬に水を飲ませてやりなさい。私は横の方からあなたを見ていきましょう。

紫は 灰さすものぞ 椿市の 八十の衝に 逢へる見や誰 (巻十二・三一〇一)

紫草の汁にはツバキの灰の汁を注いで染めるといふ、その名前を持った椿市の、人のたくさん行き交う辻で出会った君は誰だ。名を名乗って聞かせなさい。

たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 道行き人を 誰と知りてか (巻十二・三一〇二)

母が私を呼ぶ名を申しましたが、一体あなたはどこの誰ですか。道で行き会ったどこの誰とも知らないあなたに申し上げるわけにはいきません。

桜花 咲きかも散ると 見るまでに 誰かもここに 見えて散り行く (巻十二・三一二九)

咲いている桜が散ってゆくのかと思えるほどに、誰もかれもちりぢりに別れてゆく。

かるうすは 田廬の本に 我が背子は にぶぶに笑みて 立ちませり見ゆ (巻十六・三八一七)

確は田圃の小屋の軒の辺に、そして、いとしいお方はほやほやと笑って、其門口に立っていらっしやる。それが見える。

死なばこそ 相見ずあらめ 生きてあらば 白髪見らに 生ひざらめやも (巻十六・三七九二)

もしも私が死んだらもう再び逢って見ることもできないけれど、生きていてもし再び逢うことがあったら、あなたの頭にも白髪が生えないということがありましようか。

隠りのみ 恋ふれば苦し 山のはゆ 出で来る月の 頭はさばいかに (巻十六・三八〇三)

心の中でばかり焦れているのはすべのないものです。いつそ山の手を出てくる月ではありませんが、すっかり二人のことを現してしまつたらどうでしょうか。

かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて 我が思へりける (巻十六・三八〇四)

こんな風に過ぎなかつたのに、自分は、猪名川の底が深いように将来長くと思ひこんで、募っていたのだ。

事しあらば 小泊瀬山の 石城にも 隠らば共に な思ひそ我が背 (巻十六・三八〇六)

なにか事ができたならば、どんなことでもやめません、あなたが初瀬にある石棺の中に、入るようなことがあつたら、それへも一緒に入りましょう。だから心配しないでね、いとしい人よ。

安積香山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を 我が思はなくに (巻十六・三八〇七)

朝香山にある山の井よ。それは人の姿まで映るほど、清い井であるが、その泉のように、浅い軽薄なことを私は思っていない。

いさなとり 海や死にする 山や死にする 死ぬれこそ 海は潮干て 山は枯れすれ (巻十六・三八五二)

人間は死ぬ、というが、あの海や山は、死なないで、人間ばかりが死ぬものだろうか。もちろん死ぬとも。死ぬからこそ海は潮が干いて、山は木が枯れるんだ。それでわかるだろう。

このころの 我が恋力 記し集め 功に申さば 五位の冠 (巻十六・三八五八)

この頃の自分の焦れている恋の力を、同じくちからと言うから、租税のことであつたら、それをかき集めて、勲功申状として申し上げたら、五位の位を頂戴することは、疑いもない。

梯立の 熊来酒屋に まぬらる奴 わし さすひ立て 率て来なましを まぬらる奴 わし (巻十六・三八七九)

熊木の酒倉で、くだを巻いている奴、やれこれ。誘い立たして連れて来よう。よくくだを巻いている奴よ、やれこれ。

第四期 天平時代

聖武天皇の報和へ賜ふ御歌一首

大の浦の その長浜に 寄する波 豊けく君を 思ふこのころ (巻八・一六一五)

お前がいる遠江の大の浦の、長い海岸に寄せて来る波ではないが、お前のことを思って、この頃は、心が動揺してならぬ。

藤皇后、天皇に奉る御歌一首

我が背子と 二人見ませば いくばくか この降る雪の 嬉しからまし (巻八・一六五八)

あなたと二人見ているのですたら、どれほど、今降っている雪がうれしく思われることでしょう。

高橋虫麻呂の歌

勝鹿の 真間の井を見れば 立ち平し 水汲ましけむ 手児名し思ほゆ (巻九・一八〇八)

葛飾の真間の水たまりを眺めると、そこへしよつちゅう行って水を汲んでいたという、あの手児名のことを思われる。

湯原王、吉野にして作る歌一首

吉野なる 夏実の川の 川淀に 鴨ぞ鳴くなる 山影にして

(巻三・三七五)

吉野の夏実川の川のよどんでいるところに、鴨が鳴いている。その山影の川淀で。

厚見王の歌一首

かはづ鳴く 神奈備川に 影見えて 今か咲くらむ 山吹の花

(巻八・一四三五)

カジカの鳴く神奈備山の裾を流れる川に。影が映るほど、今頃はちょうど山吹の花が咲いていることだろう。

藤原広嗣、桜の花を娘子に贈る歌一首

この花の 一よの内に 百種の 言そ隠れる 凡ろかにすな

(巻八・一四五六)

この花のひとつひらの中に、百通りの語がこもっている。口では何もいわないが、その語をよく考えておろそかにしてくれるな。

遣唐使の親母の子に贈る歌一首へ并せて短歌

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 我が子羽ぐくめ 天の鶴群

(巻九・一七九二)

旅人が泊まる野に、霜が降って寒い夜には、その旅人の中にいる自分の愛しい子を羽の中に入れて温めてやってくれ。空を飛ぶ鶴たちよ。

夫君に恋ふる歌

飯食めど うまくもあらず 行き行けど 安くもあらず あかねさす 君が心し 忘れかねつも

(巻十六・三八五七)

ご飯を食べてもおいしくない。歩いていても心が落ち着かないで、愛しい人の心を忘れることができない。

大伴宿祢家持、坂上家の大嬢に贈る歌

人もなき 国もあらぬか 我妹子と 携ひ行きて たぐひて居らむ

(巻四・七二八)

夢の逢ひは 苦しかりけり おどろきて 掻き探れども 手にも触れねば

(巻四・七四一)

夜のほども 我が出でて来れば 我妹子が 思へりしくし 面影に見ゆ

(巻四・七五四)

他に誰も住んでいない国があってくればよいが、君と手をつないで行って遠慮なくずっと並んで暮らしていよう。

夢に出会ったのはすべのないものです。目が覚めて、あなたがいるかと探ってみても、手にも触りませんから。夜の中に、あなたの家を出てきたので、私が出た後で、あなたが私のことを思っているらしかった様子が、幻に見えます。

新羅に遣はさるる使人等の歌

我のみや 夜舟は漕ぐと 思へれば 沖辺の方に 梶の音すなり

(巻十五・三六二四)

自分ばかり夜舟を漕いでいるのだろうか、と思っていたら、沖の方に思いがけなく、梶の音がしている。

対馬の娘子玉櫛の歌

もみち葉の 散らふ山辺ゆ 漕ぐ舟の にほひにめでて 出でて来にけり

(巻十五・三七〇四)

紅葉した葉の散る山のわきを漕いでいる舟のように、私はこの一座の美しい御様子に感心して、わざわざやって来ました。

中臣朝臣宅守の歌

塵泥の 数にもあらぬ 我故に 思ひわぶらむ 妹がかなしき (巻十五・三七二七)

塵か泥のような数の仲にも入らない身分のようなものなのに、そのために、焦がれて悲観していらっしやる愛しい人のかわいいことよ。

狭野弟上娘子の歌

あしひきの 山路越えむと する君を 心に持ちて 安けくもなし (巻十五・三七二三)
君が行く 道の長手を 繰り畳ね 焼き滅ぼさむ 天の火もがも (巻十五・三七二四)
我が背子が 帰り来まさむ 時のため 命残さむ 忘れたまふな (巻十五・三七七四)

山路を越えて、遠方へ行こうとしている愛しいあなたを心中に持って思っているのです、ゆったりとした気持ちにならぬ。

あなたが行く道の遠い距離をたぐり寄せたたみ重ねて、焼いてなくしてしまうことのできる、天の火がほしい。あなたが帰っていらっしやるその時のために、命を取りやめておきましょうから、忘れないでください。

大伴家持の歌

珠洲の海に 朝開きして 漕ぎ来れば 長浜の浦に 月照りにけり (巻十七・四〇二九)
油火の 光に見ゆる 我が纒 さ百合の花の 笑まはしきかも (巻十八・四〇八六)
朝床に 聞けば遙けし 射水川 朝漕ぎしつつ 唱ふ舟人 (巻十九・四一五〇)

珠洲の海で朝出をして漕いで来た所が、長浜の浦で、月が照りだした。

油の火の光で見えている、あなたにももらった蔓のユリの花が、見事でうれしく思われる。

朝の寝床で聞いているいると、遠く聞こえることだ。射水川に舟を朝漕ぎしながら唄っている舟人の声が。

上丁有度部牛麻呂

水鳥の 発ちの急ぎに 父母に 物言ず来にて 今ぞ悔しき (巻二十・四三三七)

出発の用意の慌ただしさに取り紛れて、父母にきちんと話もしないでやって来ておいて、今となって後悔している。

商長首麻呂

忘らむて 野行き山行き 我来れど 我が父母は 忘れせぬかも (巻二十・四三四四)

家の父母のことを忘れてしまうこともあるかと思いつながら、野を歩き、山を歩いてやってきたが、やっぱり父母のことは、忘れることはできない。

天羽郡の上丁丈部鳥

道の辺の 茨の末に 延ほ豆の からまる君を はかれか行かむ (巻二十・四三五二)

通り道のかたわらの野茨の先の方まで、伝いはっている豆ではないが、私と二人、からみあっている愛しい方の手を、別れていかなければならないのか。

豊島郡の宇治部黒女

赤駒を 山野にはがし 取りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ (巻二十・四四一七)

乗っていた赤駒を、山野の広い所にそらしてしまって、捕まえられないというのでもないのに、まるでそのように今日はいとしい人を、馬にも乗せずに、防人として立たすので、あのだ摩の野に横たわっている小山を、地べたをひろひで歩かせねばならないことかしら。

紀女郎が怨恨の歌

今は我は わびそしにける 息の緒に 思ひし君を ゆるさく思へば (巻四・六四四)

あなたは、私が命がけで思い込んでいる方ですのに、他の女に奪われたのは、まったくこちらの油断です。その気を許していたことと思つて、今になって悲観しています。

笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌

君に恋ひ いたもすべなみ 奈良山の 小松が下に 立ち嘆くかも (巻四・五九三)

あなたに焦がれて、やるせなさに、あの奈良山の小松の下に、ぼんやり立って、溜息をついていました。

皆人を 寝よとの鐘は 打つなれど 君をし思へば 寝ねかてぬかも (巻四・六〇七)

もはや亥の刻になつて、誰も皆寝ろ、という鐘は打っていますが、あなたを思つて寝付かれません。

相思はぬ 人を思ふは 大寺の 餓鬼の後に 額つくごとし (巻四・六〇八)

大寺には餓鬼の形がありますが、元より、人間の感じがあらうとは思われません。ちょうど思っていない人に焦がれているのは、あの餓鬼の前にも行くことか、後ろにまわつて、お辞儀をしているようなもので、とんと手ごたえがなくじれつたいものです。

市原王の作

一つ松 幾代か経ぬる 吹く風の 声の清きは 年深みかも (巻六・一〇四二)

この一本松よ。いく百年立つたことであろうか。松の上を吹く風の声のさわやかなので見れば、ずいぶん年がふけているのであろう。

大伴家持が晩蟬の歌一首

隠りのみ 居ればいぶせみ 慰むと 出で立ち聞けば 来鳴くひぐらし (巻八・一四七九)

家にばかり引きこもっているのです、こんなに憂鬱になるのだ。それをのんびりさせようと表に出ると、物の声がする。それは、ヒグラシの来て鳴く声であった。

翻び翔る鳴を見て作る大伴家持の歌

春まけて もの悲しきに さ夜ふけて 羽振き鳴く鳴 誰が田にか住む (巻十九・四一四一)

春待ちうけて、何となく悲しい時分は、夜が更けてから羽を振って飛ぶシギは、どこの田に落ち着こうとしているのか。

遙かに江を浜る船人の唱を聞く大伴家持の歌

朝床に 聞けば遙けし 射水川 朝漕ぎしつつ 唱ふ舟人 (巻十九・四一五〇)

あさの寝床で聞いていると、多く聞こえることだ。射水川に、舟を朝漕ぎしながら、唄って行く舟人の声が。

興に依りて作る大伴家持の歌

春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に うぐひす鳴くも (巻十九・四二九〇)

春の野に霞がかかっている、この夕日のさしている時分に、ウグイスが鳴いている。

我がやどの いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも (巻十九・四二九一)

自分の屋敷の、少しばかりのかたまった、竹を吹く風に立てる音が、かすかに聞こえる、今日の夕暮れである。

うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば (巻十九・四二九二)

急ぐこともなく、ゆったりと照らしている春の日は、ヒバリが空へ鳴いて上っている。それを聞いている自分が、独りものを思っているので、悲しくなつて来ることだ。

三形王宅にして宴する大伴家持の歌

移り行く 時見るごとに 心痛く 昔の人し 思ほゆるかも (巻二十・四四八三)

移り変わっていく年月を思いみるたびごとに、すべないまでに、昔なじみの人々が思い出されることだ。